白居易「弟を祭る文」訳注

諸田龍美

一、解題

「弟を祭る文」は、大和二年（八二八）、五十七歳、長安にて刑部侍郎であった時の作。弟・白行簡の霊を祭った文である。

白行簡（七七六―八二六）は、字は、知退、居易より四歳下の弟。元和二年（八〇七）に進士に及第し（『旧唐書』が「貞元末」とするのは誤り）、秘書省校書郎を授けられた。その後、剣南東川府（四川省梓州）の廬担に辟せられて書記となり、元和十三年（八一八）には、当時江州（江西省九江市）の司馬に左遷されていた兄・居易のもとに移った。同十四年（八一九）には、居易の忠州（四川省忠県）刺史転任に随行し、同十五年（八二〇）、ともに長安へ召喚された。長慶元年（八二一）に左拾遺を拝命し、以後、司門員外郎、主客郎中を歴任して、宝暦二年（八二六）冬、五十一歳で卒した。『旧唐書』巻一六六の白行簡伝の末尾には「文集二十巻有り。行簡の文筆　兄の風有り、辞賦尤（もっと）も精密を称せられ、文士皆之を師法とす。居易の友愛　人に過ぎ、兄弟　相待すること賓客の如く、行簡の子・亀児は、多く（居易）自ら教習し、（亀児は）以て名を成すに至る。当時の友悌、以て焉（こ）れに比する無し」と指摘す

る。

本稿は、『白氏文集』巻六十九（馬元調本。那波本では巻六十）所収の祭文「祭弟文（弟を祭る文）」（花房番号二九三二）に詳細な訳注を施したものであり、日本語による注釈としては初の試みとなる。底本には、今回は馬元調本を使用した。また、理解の便宜のため、全体を六つの段落に区切り、【　】によって示した。

二、本　文

【一】 維大和二年歳次戊申、十二月壬子朔、三十日辛巳、二十二哥居易、以清酌庶羞之奠致祭于郎中二十三郎・知退之靈。日月不居、新婦・龜兒等釁酷如昨。俯及歳暮、奄過大祥。禮制云終、追號永遠。哀纏手足、悲裂肝心。痛深痛深。孤苦孤苦。

【二】 嗚呼。自爾去來、再周星歳。前事後事、兩不相知。今因奠設之時、粗表一二。吾去年春、授秘書監賜紫、今年春、除刑部侍郎。孤苦零丁、又加衰疾、殆無生意、豈有宦情。所以僶俛至今、待終龜兒服制。今已請長告、或求分司。卽擬移家、盡居洛下。亦是夙意、今方決行。養病撫孤、聊以終老。

【三】 合家除蘇蘇外、並是通健。龜兒頗有文性、吾每自敎詩書、三二年間、必堪應舉。阿羅日漸成長、亦勝小時。吾竟無兒、窮獨而已。茶郎・叔母已下、並在鄭滑、職事依前。蘄蘄・卿娘・盧八等同寄蘇州、免至飢凍。遙憐在符離莊上、亦未取歸。宅相得彭澤場官、各知平善。骨兜・石竹・香鈿等三人久經驅使、昨大祥齋日、各放從良。尋收膳娘、新婦看養。下邽楊琳莊、今年買了、并造堂院已成。往日亦曾商量、他時身後甚要新昌西宅、今亦買訖。

【四】 爾前後所著文章、吾自檢尋編次、勒成二十卷、題爲『白郎中集』。嗚呼、詞意筆跡、無不宛然。唯是魂神、不

知去處。每開一卷、刀攪肺腸、每讀一篇、血滴文字。擬憑崔二十四舍人譔序、他日及吾文集、同付龜・羅收傳。

【五】 前年已來、合家所造齋供功德、皆領得否。朔望晨夕嚮奠、復嘗來無。不諭音容、濳歿已久。乃至夢寐、相見全稀。豈幽冥道殊、莫有拘礙。將精爽遷散、杳無覺知。不然、何一去三年而茫昧若此。

【六】 吾今頭白眼暗、筋力日衰。黄壤之期、亦應不遠。但恐前後乖隔、不知得見爾無。下邽北村、爾塋之東、是吾他日歸全之位。神縱不合、骨且相依。豈戀餘生。願畢此志。嗚呼、奠筵將徹、幃帳欲收。此生之間、豈有見日。未死之際、應無忘期。仰天一號、心骨破碎。猶冀萬一、聞吾此言。痛心痛心、千萬千萬。尚饗！

三、訓　読

【一】 維れ大和二年歳次は戊申、十二月壬子朔、三十日辛巳に、二十二の哥居易、清酌庶羞の奠を以て祭を郎中二十三郎・知退の靈に致す。日月は居らざるも、新婦・龜兒等が疊酷すること昨の如し。俯して歳暮に及び、奄ち大祥を過ぐ。禮制は云に終はるも、追號は永遠なり。哀しみは手足に纏ひ、悲しみは肝心を裂く。痛み深く痛み深し。孤り苦しみ孤り苦しむ。

【二】 嗚呼。爾去きて自り來、再び星歳周る。前事後事、兩ながら相知らざらん。今奠設の時に因りて、粗一二を表さん。吾去年の春、秘書監を授けられ紫を賜り、今年の春、刑部侍郎に除せらる。孤苦零丁にして、又衰疾を加へ、殆ど生意無く、豈に宦情有らんや。所以に僶俛として今に至り、龜兒の服制を終へんことを待つ。今已に長告を請ひ、或は分司を求む。卽ち家を移して、盡く洛下に居らんことを擬す。亦た是れ夙意にして、今方に決行せんとす。病を養ひ孤を撫して、聊か以て老いを終へん。

【三】合家蘇蘇を除くの外は、並びに是れ通健なり。龜兒は頗る文性有り、吾毎に自ら詩書を敎ふれば、三二年の間には、必ず舉に應ずるに堪へん。阿羅は日に漸く成長し、亦た小時に勝れり。吾には竟に兒無く、窮獨するのみ。茶郎・叔母已下は、並びに鄭滑に在りて、職事は依前たり。蕲蕲・卿娘・盧八等は同じく蘇州に寄せて、飢凍に至るを免る。遙憐は符離の莊上に在りて、亦た未だ取歸せず。宅相は彭澤の場官を得て、各の平善なるを知る。骨兜・石竹・香鈿等の三人は久しく驅使を經て、昨の大祥の齋日に、各の放ちて從良せしむ。尋いで膳娘を收め、新婦をして看養せしむ。下邽の楊琳莊は、今年買ひ了り、幷びに堂院を造りて已に成れり。往日亦た曾て商量して、他時身後に甚だ要する新昌の西宅も、今亦た買ひ訖れり。

【四】爾の前後著はす所の文章は、吾自ら檢尋編次して、勒して二十卷と成し、題して『白郎中集』と爲せり。嗚呼、詞意筆跡、宛然たらざるは無し。唯だ是れ魂神のみ、去處を知らず。一卷を開く毎に、刀肺腸を攪し、一篇を讀む毎に、血文字に滴る。崔二十四舍人に憑って序を譔せしめ、他日吾が文集と、同じく龜・羅に付して收傳せしめんと擬す。

【五】前年已來、合家の造す所の齋供功德は、皆領し得たるや否や。朔望晨夕の嚮奠は復た嘗め來たるや無きや。音容を諭らず、濳歿已に久し。乃ち夢寐に、相見ること全く稀なるに至る。豈に幽冥は道殊なれば、拘礙有ること莫からんや。將精爽遷り散じて、沓として覺知無からんや。然らずんば、何ぞ一たび去りて三年にして茫昧たること此くの若くならんや。

【六】吾今頭白く眼暗く、筋力日に衰ふ。黄壤の期、亦た應に遠からざるべし。但だ恐らくは前後乖隔すれば、爾を見るを得るや無きやを知らざるを。下邽の北村、爾が塋の東は、是れ吾他日歸全の位なり。神は縱ひ合はざるも、骨は且に相依らんとす。豈に餘生を戀はんや、願はくは此の志を畢へんことを。嗚呼、奠筵將に徹せ

んとし、幃帳收めんと欲す。此の生の間、豈に見日有らんや。未だ死せざるの際、應に忘期無かるべし。天を仰ぎて一たび號び、心骨破碎す。猶ほ 冀はくは萬一、吾が此の言を聞かんことを。痛心痛心、千萬千萬。尚はくは饗けよ！

四、通釈

【一】 大和二年（八二八年）歳次は戊申、十二月壬子の朔、三十日辛巳に、二十二の兄・居易が、ここに、清酒と諸々の馳走をお供えして、郎中二十三郎・知退の霊をお祭りする。月日は止まることなく移ろうが、新婦や亀児らの痛恨の悲しみは以前と変わることはない。瞬く間に年の瀬を迎え、あっという間に大祥の祭も過ぎてしまった。定められた葬礼はここに終了するが、なんじを追慕し号哭する気持ちは永遠に消えることはない。悲哀は、我が手足にまつわりつき、我が内臓を切り裂く。悲痛はこの上もなく深く、孤独はこの上もなく苦しい。

【二】 ああ、なんじが逝去して以来、二年の歳月が経過した。この両年の出来事を、なんじはいずれも知らないであろう。今、祭壇を設けた葬礼の時にあたって、少しばかり報告しておこう。わたしは、去年の春、秘書監を授けられて金紫を賜り、今年の春には刑部侍郎に任ぜられた。しかし、孤独に苦しみ気力も失せ、そのうえ体も病み衰えて、ほとんど生気を失った状態であり、どうして官の職務に励もうという気になれようか。無理をしながら何とか今に至ったという次第であって、亀児の規定の服喪が終わるのを待っているところだ。今すでに長期の休暇を申請したが、あるいは分司の職を求めたので、もし認可されたらすぐに引っ越して、一家を挙げて洛陽に住もうと考えている。これは前々からの願いでもあったが、今まさに決行しようと思う。洛陽では療養しながらお前の孤児を養い、し

ばらく晩年を過ごしたいと考えている。

【三】 両家の一同は、蘇蘇を除くほかは、全員が元気に過ごしている。亀児にはとても文学の才能があり、わたしがいつもみずから詩作と書法を教えているから、二、三年のうちには、必ずや科挙に応じるに十分な実力がつくであろう。阿羅も日ごとに少しずつ成長し、幼い頃とは違ってきた。わたしには結局男子は授からず、ひたすら孤独で寄る辺ない日々を送っている。茶郎や叔母以下の親族は、みな鄭滑で暮らしており、職務は以前と同じである。蘄蘄・卿娘・盧八らは共に蘇州に身を寄せて、飢えたり凍えたりはしないですんでいる。遥憐は、符離の荘園に居て、未だに嫁いではいない。宅相は、彭沢の塩場の官職を得た。みなそれぞれ無事に暮らしているようだ。骨兜・石竹・香鈿ら三人は長い間働かせてきたが、先日の大祥の祭の日に、それぞれ解放して自由にしてあげた。その後、給仕係の女子を採用し、なんじの妻がその世話をしている。下邽の楊琳荘は、今年買い終わり、建物や庭の造築もすでに完成した。また先頃には、昔なんじと相談して、将来（われわれが）死んだ後（遺された家族にとって）たいへん重要になると考えた新昌里の西の邸宅も、もうすべて買い終えた。

【四】 なんじが生前に著作した文章は、わたしが自ら調べて編纂し、版木に刻んで二十巻の書巻としてまとめ、『白郎中集』と名づけた。ああ、文意や筆跡はどれも生きていた時さながらなのに、ただ、なんじのたましいのみ、どこへ行ったのかわからない。一巻を開くごとに、刀で肺や腸をかき乱され、一篇を読むごとに、血が文字に滴り落ちるよう（な悲痛な気持）だ。崔二十四舎人に依頼して序を書いてもらい、後日、我が文集と併せて亀児と阿羅とに授け、収蔵して将来に伝えさせようと考えている。

【五】 昨年以来、両家の家族で営んできたお供え等の功徳は、みな受け取ることができたであろうか。朔日と十五日および朝夕の供え物も、味わうことができたであろうか。声も姿もわからず、（なんじのたましいが）行方知れずと

なって久しい。今では夢の中でもなんじを見ることはまったく稀になってしまった。幽冥界は（この世とは）道理を殊にするから、どうして障碍がないはずがあろうか。それとも、たましいは徐々に雲散霧消してしまい、まったく知覚が無くなってしまったのであろうか。そうでないとすれば、どうして、（この世を）去って（わずか）三年にして（たましいが）これほど茫漠曖昧となってしまうことがあろうか。

【六】 わたしは今や髪も白く眼もよく見えず、体力も日ごとに衰えてしまった。黄泉路に赴く日も、きっと遠くないことであろう。ただ心配しているのは、前後の懸隔があるので、先に逝ったなんじと会うことができるかわからないということである。下邽の北村にある、なんじの墓地の東側（の土地）は、わたしが後日、生を全うした後に埋葬される場所である。たとえ、たましいは会うことができないとしても、遺骨どうしは寄り添うことができるであろう。余生を長らえたいなどとは思っていないが、この計画だけは成し遂げたいと願っている。ああ、いまや祭壇を撤去し、とばりを片付ける時が迫っている。この世に生きている限り、なんじと再会できようはずもない。しかし、生きているうちは、決してなんじを忘れることはない。天を仰いで一たびさけべば、身も心もこなごなに砕けそうだ。なお願うのは、万が一にでも、わたしのこの言葉をなんじが聞いてくれること。わが心ははげしく痛む。くれぐれも、どうか饗けてくれたまえ。

五、語　釈

【二】 ○歳次　歳星（木星）のやどり。歳星は十二年で天を一周し、一年に一次を行く。『左氏伝』襄公二十八年に、「歳は星紀に在り、玄枵に淫す」とあり、杜預の注に「歳は歳星なり」と。『文選』巻十、潘岳の「西征の賦」に「歳

は玄枵に次（やど）り、月は蕤賓に旅（やど）る」と。○二十二哥居易　「二十二」は、白居易の排行。「排行」は、一族中の同世代の者を年齢の順序で並べた数。○清酌　清い酒。神に捧げる酒。宗廟を祭る際の酒。○庶羞之奠　「庶羞」は、種々の美味な御馳走。「庶」は、衆。「羞」は、進。多くの珍味美味を進献すること。『礼記』王制第五に「庶羞は牲を踰えず」と。○郎中二十三郎知退　「郎中」は、官名。唐以後は、各部の長官をいう。白行簡は、主客、膳部、度支等の郎中を歴任したのでいう。「二十三」は、白行簡の排行。「二十三郎」は、二十三番目の男子。「知退」は、字。○不居　止まらないこと。例えば、『老子』第二章に「是を以て聖人は（中略）為して恃まず、功成りて居らず」と。○新婦　ここでは、弟の嫁、の意。すなわち、行簡の妻。○亀兒　白行簡の子。巻二十の「路上寄銀匙与阿亀」（一三二六）詩に「亀子を留め住せしむるに縁（よ）り、涕涙一（いつ）に闌干たり」と。○疊酷　心に血を塗るような激しい痛恨。「疊」は「釁」の俗字。犠牲の血を器に塗って神を祭ること。ちぬる。ちまつり。「酷」は、痛み恨むこと。痛恨。○俯　俯仰の間。少しの時間。たちまち。○大祥　葬儀後の祭の名。十三ヶ月で祭るを「小祥」、二十五ヶ月で祭るを「大祥」、二十七ヶ月で祭るを「禫」という。『旧唐書』によれば、白行簡が亡くなったのは「宝暦二年（八二六）の冬」であり、この祭文が書かれた大和二年（八二八）十二月までには、二十四から二十六ヶ月が経過している。大祥が二十五ヶ月目の祭りであることからすれば、白行簡が亡くなったのは、宝暦二年の十一月であったと推定される。○礼制　礼儀のきまり。○追号　ここでは、死者を追慕して号哭すること。○肝心　肝臓と心臓。転じて、心をいう。

【二】　○星歳　としつき。星霜歳月の略。○前事後事　前に起こった事柄と、それに続いて起こった事柄。『史記』巻六、秦始皇本紀の賛に「野諺に曰く、前事の忘れざるは、後事の師なり」、『文選』巻三七、晋・劉琨の「勧進表」に「前事の忘れざるは、後事の元亀なり」と。「元亀」は、立派な手本。○一二　那波本は「一一」に作る。形近に

よる訛字、または欠誤であろう。宋本・馬本・郭武定本によって改める。○秘書監賜紫　「秘書監」は、宮中の図書を掌る秘書省の長官。「賜紫」は、「賜紫金魚袋」に同じ。特に紫衣を着、黄金で作った魚形の袋（金魚袋）を帯びるのを許可されていること。唐代、三品以上は紫衣を服し、五品以上は緋衣を着たが、その官位に及ばない者にも、しばしば賜紫・賜緋の挙があり、紫衣・緋衣を賜った。『旧唐書』巻四五、輿服志に「恩制に緋紫を賜賞し、例（おほむね）魚袋を兼ねしむ。之を章服と謂ふ」と。○尚書刑部侍郎　刑法・監獄・訴訟を掌る尚書刑部の次官（法務次官）で、正員一名。正四品下。○孤苦零丁　孤独に苦しみ気力も失せること。「零丁」は、志を失うさま。○衰疾　おとろえやむ。衰病。○生意　生き生きしたおもむき。生気。○宦情　仕官したい志。ここでは、官職に励む意欲。○僶俛　勉め励む。また、無理をする。○服制　喪服の制度。喪中の定め。○長告　長期の休暇。○分司　ここでは、東都洛陽での勤務。○夙意　かねての意見。前々からの願い。夙志。○養病　やまいをやしない治す。病気の養生をする。○撫孤　孤児を救済する。ここでは、白行簡の遺児を養育すること。○終老　晩年を過ごす。

【三】　○合家　家族一同。全家。ここでは、白行簡の遺族や使用人も合わせていう。○蘇蘇　不詳。白行簡の子女か。○通健　すべて健康。あまねく元気。○文性　文学的才能。文を愛好する天性。○詩書　『詩経』と『書経』。また、詩作と書法。ここでは、後者の意であろう。○応挙　科挙に応じる。官吏登用試験を受ける。○阿羅　白居易の女児。元和十一年（八一六）、居易が四十六歳の時に江州にて生まれた。この時、十三歳。『白氏文集』では「羅子」「羅児」などの名でも見える。「弄亀羅」（〇三一二）・「羅子」（一〇〇〇）等の詩を参照。○小時　幼い時。少時。○窮独　孤独で寄る辺ないこと。ここでは、跡継ぎの男子に恵まれないのでいう。○鄭滑　鄭州（今の河南省鄭州市）と滑州（今の河南省滑県の東）の一帯。滑州には鄭滑節度使の治所が置かれ、滑州・鄭州を領した。○職事　官職上の仕事。また、生計。職業。○依前　従前。○飢凍　うえこごえる。○符離　県名。今の安徽省宿県。白氏一族

の荘園や私邸があった。○取帰　結婚すること、であろう。「帰」は、嫁ぐ。○宅相　白居易の長兄・白幼文の男児。「祭浮梁大兄文」（一四五〇）に「宅相は癡小にして、居易には男無く、撫視の間、猶子に過ぐ」と。○彭沢　県名。今の江西省湖口県の東。○場官　塩場の役人。○平善　平安無事をいう。安泰にして健康。○骨兜・石竹・香鈿　いずれも白家の使用人の名。○斎日　物忌みする日。○従良　ここでは、奴婢（使用人）が労役の満期を迎え解放されること。奴婢が解放されて自由民になること。○膳娘　固有名詞ではなく、飲食の世話をする給仕係のむすめ、の意であろう。○看養　世話をする。面倒をみる。また、かわいがり養う。○下邽　県名。今の陝西省南鄭県の地。「唐太原白氏之殤墓誌銘并序」（一四七〇）に拠れば、「下邽県義津郷の北岡」に、白家累代の墓所があった。○楊琳荘　別荘の名。○堂院　建物や庭。「堂」は、広く高い表向きの広間。「院」は、囲いにかこまれた庭。中庭。○往日　過ぎ去った日。昔日。○商量　協議する。考えはかる。○他時　先に。往時。○身後　わが身の死んだ後。死後。○新昌西宅　白居易が長安新昌坊に邸宅を構えたのは、長慶元年（八二一）の春、五十歳の時。この折りに新居を詠じた詩に「題新昌新居」（一二三四）・「新昌新居書事四十韻、因寄元郎中張博士」（一二五九）などがある。

【四】○検尋　しらべさがす。○編次　編みついでる。順序にしたがって編み並べる。○勒成　版木に刻み、書物の体裁に整える。書物として完成する。○白郎中集　白行簡が曾て主客・膳部・度支などの郎中職を務めたことから付けられた書名。○詞意　言葉の意味。辞意。○筆跡　筆のあと。書き記した文字。○宛然　さながら。明瞭なさま。○魂神　たましい。○肺腸　肺と腸。心をいう。『詩経』大雅・桑柔に「自ら肺腸有りて、民をして卒（ことごと）く狂せ俾（し）む」と。○崔二十四舎人　崔咸のこと。朱金城『白居易集箋校』の考証に拠れば、この祭文が書かれた大和二年の当時、崔咸は、職方郎中・知制誥の職にあり、唐では知制誥をも「舎人」と称したという。崔咸の名は、「惜落花贈崔二十四」（〇九一八）詩のほか、一〇五五・三一七〇にも見える。

【五】○斎供　霊前に供える食事。○功徳　ここでは、霊に供物を献げる善行のこと。お供え。○朔望　陰暦の朔日と十五日。○晨夕　朝夕。朝晩。○嚮奠　物を供えてお祭りする。○音容　声と姿。音声や容姿。○夢寐　夢を見ている間。ねている間。○相見　あいまみゆる。対面する。○幽冥　地下。黄泉路。冥土。○拘礙　かかわりさまたげる。縛りや妨げ。障碍。○精爽　たましい。『左氏伝』昭公二十五年に「心の精爽、是を魂魄と謂ふ」と。「精」字、那波本は「情」字に作る。形近による訛字。宋本・馬本により改める。○覚知　心にさとりしる。知覚。○茫昧　はっきりしない。ぼんやりしている。

【六】○筋力　筋肉の力。体力。骨力。○黄壤　黄泉。あの世。『白氏文集』巻十五「顔処士の墓に過（よ）ぎる」詩（〇八二五）に「長夜は肯て黄壤をして暁けしめんや、非風は白楊の春を許さず」と。○乖隔　そむきへだたる。○塋　はか。周囲をぐるりと区切った墓地。那波本は「瑩」字に作る。形近による訛字。郭武定本・顧学頡『白居易集』・朱金城『白居易集箋校』により改める。○帰全　全うして帰す。身体を毀傷することなく、生まれたままの完全さを保って死ぬこと。○余生　あまりのいのち。今後の生涯。○幃帳　とばり。たれぎぬ。○一号　一たび呼ぶ。一たびさけぶ。○心骨　心とほね。精神と身体。からだ全体。心身。○破碎　うちくだく。やぶり滅ぼす。やぶれくだける。○千万　いくえにも。くれぐれも。○尚饗　祭文の末尾に用いる常套句。『儀礼』士虞礼に「卒辞に曰く、哀子某、来日某、爾（なんぢ）を爾の皇祖某甫に隮（のぼ）せ祔せんとす。尚はくは饗けよ」と。

※本稿は科学研究費補助金〔基盤研究（C）課題番号：二一五二〇三七八〕の助成を受けて行った研究成果の一部である。